

911.3  
18

芭蕉翁桃青居士



續夏野

江州栗津義仲寺

芭蕉翁終焉記

いづれかあるまゝに... 芭蕉翁終焉記の本文が縦書きで記述されている。

芭蕉翁終焉記の表紙に大きな文字で書かれたタイトル。

芭蕉翁終焉記の表紙に縦書きで記述された本文の一部。









踏らぬてるるに柱をばうけ回す

この柱をばうけ回す心もせむやとてまじりては

かゝる風情の上も死に方の道と切ら思ふて悔ふる人の

おのれをばうけ回す心もせむやとてまじりては

是つあやしくも水にけり非集の 木節

風の空にふととも花の香 瓜来

是つあやしくも水にけり非集の 惟然

神をばうけ回す心もせむやとてまじりては 正秀

神のまがれし力や木のうせ 之道

唐土くいつくまより唐のれ 加香

能くもやうもくわいとは何味氏 支考

あはれや使よつとそそ 春舟

作らんと 大神

いのちをばうけ回す心もせむやとてまじりては 乙州

この柱をばうけ回す心もせむやとてまじりては

かゝる風情の上も死に方の道と切ら思ふて悔ふる人の

おのれをばうけ回す心もせむやとてまじりては

是つあやしくも水にけり非集の 木節









為は書と船との自無に候なりとありぬる也  
か七日、程こまのさうくまきよ、遊書の興のさ  
ふかいやまをいり、人とのさけあて合裁と  
新書の記と、物さし、程もさるる、同の  
春、箱とありぬる、是とて、同の候なり

於栗津義仲寺牌位下

晋子書

晋元祿七甲戌歲十月十二日



